

カスタネット通信4月号は、patient journey(ペイシエント・ジャーニー) についてのおはなしです。Patientは『患者』、journey は『旅』の意味ですが、journeyにはその他に『ある状態から長い時間をかけて別の状態に変わるような比喻としての旅』の意味もあるようです。今月号で取り上げるペイシエント・ジャーニーは、ある人が聞こえにくさに気づき、聞こえにくさによる生活上の困難を認識し、補聴器などを用いて対処するという“聞こえを良くするための旅”です。

ペイシエント・ジャーニー



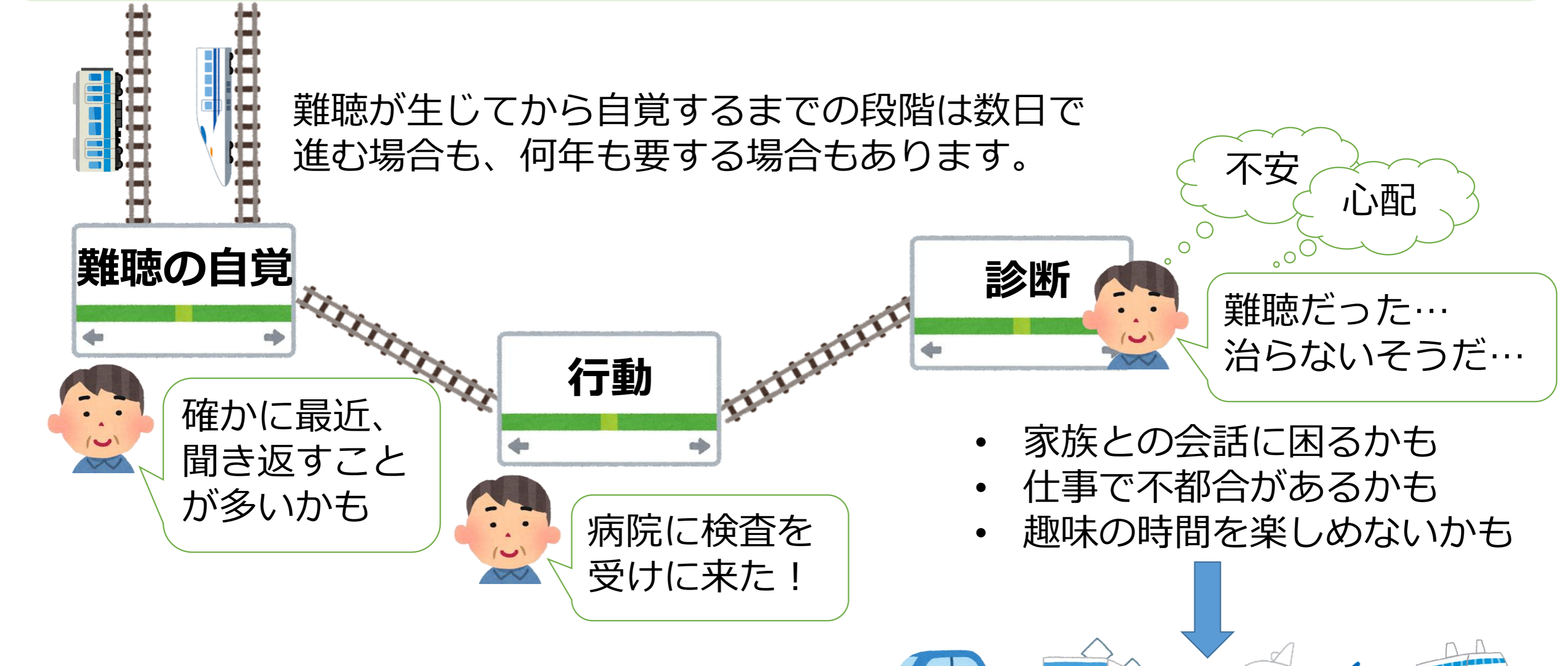
出発!

難聴の自覚前

そうかなあ?

最近テレビの音が大きくない?

家族にきこえの悪さを指摘される

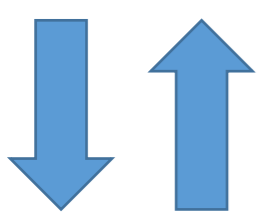


聴覚リハビリテーション

オギジビの補聴外来で行っている、難聴・補聴器についての説明、補聴器の試聴、装用練習がこの段階に相当します。難聴のある個々人の状況、必要とすることに合わせて十分な時間をかけて行います。

リハビリテーションって?

病気の後の機能回復訓練といったイメージがあるかもしれませんが、今回取り上げた『聴覚リハビリテーション』は難聴のために不自由を感じていることを、補聴器の装用やコミュニケーション方法の工夫により軽減することを指します。



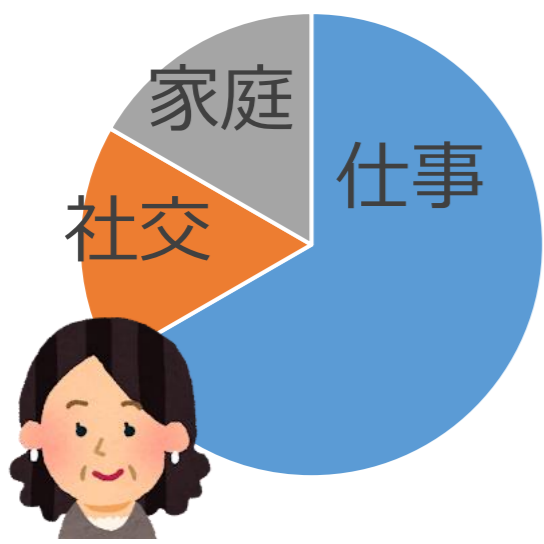
適応

補聴器を日常生活で上手に活用している段階です。もし新しい問題が生じたり、新しい機器を試す必要があれば、聴覚リハビリテーションの段階に戻ります。

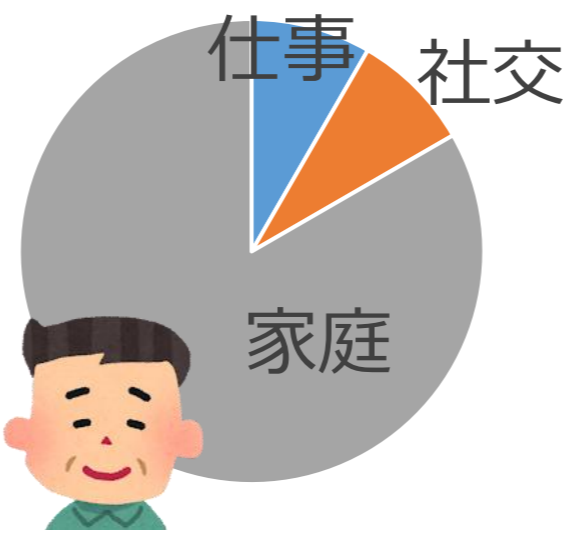


個々人に合わせた聴覚リハビリテーション

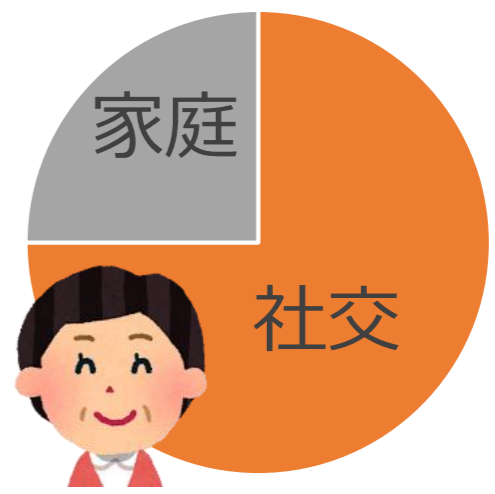
前頁で、聴覚リハビリテーションは『個々人の状況、必要とすることに合わせ』で行うと述べました。



『会議が多くて、仕事でこまる』
『家族は聞こえのことをよく理解してくれる』
『趣味は水泳』



『家族と過ごす時間が圧倒的に多いから、その会話をなんとかしたい。』



『普段は一人暮らしで、テレビを見て過ごしている。』
『スポーツ、音楽鑑賞、旅行など趣味が多い』

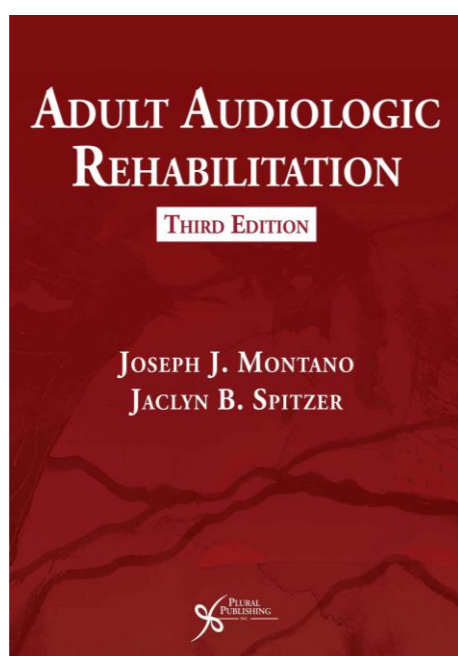
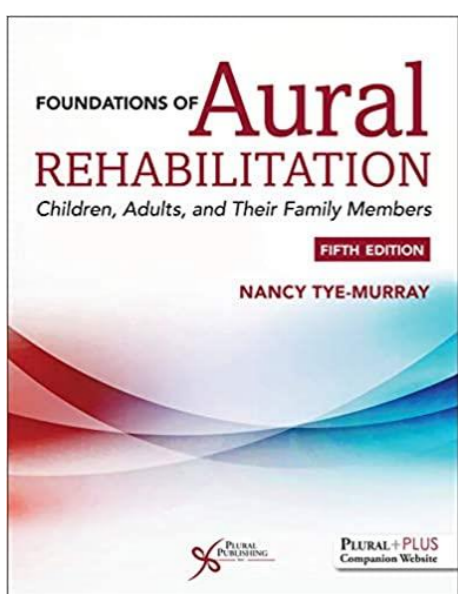
イラストに示したように、個々人によって聞こえにくいことで困る場面は違います。そのため選ぶ補聴器、必要な支援は異なります。

聴覚リハビリテーションの段階で行う内容の詳しい説明は、次回以降のカスタネット通信でお伝えします！

お知らせ

『一月往ぬる二月逃げる三月去る』と言われますが、そのことば通り、あっという間に新年度を迎えました。

今年度の『オギジビ文庫』は引き続き“かがくのとも”が月刊誌として届きます。“こどものとも”は昨年度のシリーズより、短めのおはなしになっています。絵本マスターの紹介POPとともに楽しみください。お子さんたちに人気の“いきものづくし ものづくし”は12冊コンプリートしたため、4月からは“master's select 2022”がオギジビ文庫オリジナル月刊誌として届きます。一足お先に1年分のリストを見たのですが、のりもの好き、どうぶつ好き、むし好き、みんなが楽しめるラインナップでした。待ち遠しいですね！



聴覚の分野において、補聴器や人工内耳は日進月歩の進化を遂げています。しかし、聞き取りの改善には機械任せにできないところも多々あります。補聴器・人工内耳を日々の生活で活用していくためには、機器の進歩に加え、装用者の使いこなしや周囲の人の理解が必須となります。

そこで私たち言語聴覚士に何ができるかということですが、補聴機器が十分効果を発揮できるように、難聴のある方々、そのご家族などに難聴や補聴機器の理解を深めてもら

ることが大事なのではないかと考えました。上の2つは『聴覚リハビリテーション』に関する本です。今年度のカスタネット通信では白い本の内容をもとに皆さまに分かりやすく、難聴、補聴器についてお伝えしていく予定です。小豆色の本は今年度、古巣の言語聴覚士と共に読んで勉強します。そして臨床に還元していきたいと思ひます！